

『秋日和』

Aの家。

「……で、何て言ったの？」

「だって、そんなの嫌じゃない。しかも相手はお父さんの友だちだよ、不潔だよ」

「ふーん、それで飛び出して来たの」

「だって、そんなの、汚らしいじゃない」

「ふーん、そう言うこと」

「だって、私でさえまだはつきりお父さんのことを覚えてるのに、お母さんまるでもう忘れちゃったみたいに、そんなこと私どう考えても許せない」

「分かるけど、そりゃ少し勝手すぎない」

「何が……」

「お母さんの身にもなってあげなきや」

「どういうこと？」

「だってさ、お母さんだって女だよ、そこを考えてあげなきや」

「どういう意味」

「あんた自分には好きな人があつて、お母さんにだけにどうしてそんなにきびしくするの、そんなの勝手じゃない。私だったら黙って見てるな」

「じゃ、こんな時あんた平気？」

「平気だよ。お母さんはお母さんでいいじゃない」

「人のことだと思つて……」

「違うよ、私今のお母さんが来たとき平気だったよ。だからつて死んだお母さんのことを忘れてるわけじゃないよ。今だって眼をつぶればお母さんの顔はつきり浮いてくるもの。うちのお父さんはだらしのない人だけど。でもそれはそれでいいじゃない。お父さんはお父さんなんだから」

「でも、私はそうは思わない」

「思わないつたつてそういうものだよ。世の中なんて、あんたが考えているみたいにそんなにきれいなものじゃないんだよ。なに、赤ん坊みたいに……ご飯たべる？」

「私、帰る」

「泊まつていくんじゃないの？」

「帰る」

「じゃ、ご飯だけ食べて行きなよ」

「たくさん」

「本当に帰るの？　じゃ帰りな……何だ、赤ん坊！」

A B A B A B

A B

A B A B

A B

A B A B A

B A B A B A